

# たじみのたからもの 88

陶器将軍 加藤助三郎① 満留寿商会

文化財保護センター 岩井 TEL 25-8633

加藤助三郎は安政4年(1857)に市之倉で生まれ、明治5年(1872)に東京深川で「美濃屋」という陶器商を始めました。その後郷土の同業者とともに東京日本橋で「濃栄社」という販売会社を設立し、同22年(1889)には独立して東京京橋区南新堀に「満留寿商会」を開店しました。満留寿商会の本店は製造窯元の市之倉にあり、名古屋に輸出陶磁器を主に扱う支店を置きました。

満留寿商会の主力商品は、市之倉の盃で、御大典記念や日清戦争大勝記念、長寿祝など、さまざまな記念盃を売り出しました。また、満留寿商会はいち早く輸出を始めたことでも知られています。同22年にシン



▲明治29年満留寿名古屋支店決算記念撮影。前列右より3人目が助三郎(個人蔵)

ガポール、香港、広東、天津向けに2000個以上の陶磁器を農商務省を通じて販売したことを始めとし、助三郎が監査役であった神戸・神陶株式会社で南アフリカ・ケープタウンへ直輸を始め



▲鳩杖盃(個人蔵)

めるなど、海外販路の拡充に力を注ぎました。

満留寿商会の製品は博覧会や品評会で数々の賞を受賞しています。同28年(1895)の第四回内国勸業博覧会で有功2等賞を受賞、翌年の第1回五二会品評会では有功賞を受賞しました。同33年のパリ万国博覧会では銅賞を受賞し、ハノイ大博覧会では金賞、アメリカ・セントルイス万国博覧会では銀賞を受賞するなど多くの賞を受けています。

文化財保護センター企画展  
「陶器将軍 加藤助三郎」(～8月24日)

土岐川観察館の自然だより

## 青と緑の物語

文化財保護センター 土岐川観察館 TEL 21-2151

### 土岐川の赤い鳥

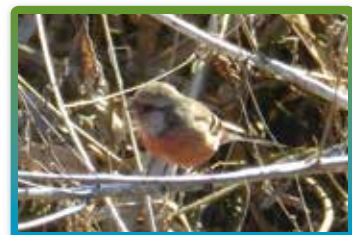
土岐川で見られる赤い鳥は、冬渡って来るオシドリ(全長45cm)のオスで、多治見市内では一番広い範囲で見られ、一番越冬数の多いカモです。オスの冬羽は、だいたい色、紫色、白色など多彩な色ですが、夏から初秋にかけては、全身がメスと同じ灰褐色になります。クチバシは赤色のままです。余談ですが、オシドリはオシドリ夫婦では無く、毎年相手が変わると言われています。冬のオスは繁殖期で、メスを他のオスに取られないように、いつもメスの近くにいます。こんな行動から、仲がいいと思われる



▲オシドリ(左オス・右メス)

たかもしれません。河川敷で見られる赤い鳥は、冬渡ってくるベニマシコ(全長15cm)のオスで、林縁部の草地など

でも見られますが、見る機会の少なくなった鳥です。オスの冬羽は、胸から腹にかけてピンク色になり、「ピッポ・フィッ」と口笛を吹いたような声で鳴きます。春になると、ヒレンジャク(全長17.5cm)が渡ってくることもあります。ヒレンジャクは、尾羽の先端が赤い鳥で、ヤドリギの実などを食べますが、渡ってこない年もあります。



▲ベニマシコ(オス)



▲ヒレンジャク

参考文献 フィールドガイド日本の野鳥増補改訂新版  
(日本野鳥の会岐阜会員 富田増男)